

琉球語彙 (一)

伊波普猷

Kuchubi 疣^{いぼ}。鬼界島の方言では *kumbi* 又は *kubbi* になつてゐる。琉球語の音韻變化の法則に従へば、オ列の *ko* は *ku* となり、ウ列の *ku* は *chu* となり、*ni* は時偶^{じぐ}と^となるから、この語は古事記の國つ罪の中の胡久美^{こくみ}と同語根のものに違ひない。和名抄疾病部癩類中に、瘡^{かさ}は寄肉也^{よにくなり}阿末^{あま}之^し胡久美^{こくみ}とあり、琉球語でもグーフ(瘡)やクチ^{クチ}ニ^ニビ(疣)を *shishi-nu-amayn* (剩肉)といふことがあるから、胡久美にはもと贅肉の義があつたであらう。コクはコブ又はグーフと關係があるやうに思はれるが、琉球語でビに肉の義のあることは、シンの同義語アッタミ(單にミーといふ場合もある)といふのがあり、小兒語で肉をビー又はビービーといつてゐるので明である。これは朝鮮語で *hok* にこぶ(贅) *sh* ぼ(疣)の義があり、ミ^ミに肉の義があるのと比較して考ふべきものであらう。

琉球語彙 (一)

クチユビのビはまたイチユビ(母)クイー(胡頹子)のビ・イチユビヤー(木母)のビヤーの同じく、實の義に解することも出来る。これに就いては白石も既に東雅の中に葡萄^{えび}を赤實^{えび}と解し、葡萄^{えび}を赤實^{あけび}と解してゐる。それから、疣を意味する八重山方言は *tutsibe* じ *kuchubi* に似通つてゐるが、鳩間島の方言では *putsumé* になつてゐるから、これは直接胡久美から轉訛したのではなく、その同義語布須倍^{ふすべ}から轉訛したものゝやうに思はれる。胡久美と布須倍とは語根を異にするものゝやうに考へられてゐるが、二者から銘々の音韻法則に従つてそれぐく轉訛した二語が、殆ど同じ形になつてゐるのを見ると、胡久美と布須倍とはもと同語根のもので、古い時代にどちらからか分化したものに違ひない。それは殆ど同じ概念を表す語に「銜む」^{なぐむ}等が存在してゐるのを見てわかる。因にいふが、語源を取扱ふ人に取つては、その音韻法則を心得て置くことが基礎的知識の一でなければねらないから、「國語と國文學」第七十六號所載、拙稿「琉球語の母音組織と口蓋化の法」則を参照していただしたら好都合である。

Kamayun 「カマヘル」探す・拾ふ・求める等の義を

有する語で、其の同義語には、*tun-yun* (トマヘル) といふのがあるが、後者は國語「とめこかし」のトメルと同語である。娶る或は妻帯するには、*tuji kameyyn* 又は *tuji tuneyyn* とすつて、南島の島々では殆ど同一の言表し方をしてゐる。序でに言ふが、池間島の舟漕歌の中に「や里から 妻覓ぎ」といふのがある。この覓ぎには、國語同様求めの義があるが、又交接する義もある。この語も古くは前の二語の同義語として、南島全體で使はれてゐたに違ひない。私は先達而東恩納寛惇氏から、『提中納言物語』のこのついでに *kameyyn* に似た語があることを教へられて、早速明治書院發行の久松潜一氏校註本を播いて見たら、

物隔てのけはひいと氣高う、凡人とは覺え侍らざりしに、ゆかしうて、物はかなき障子の紙のあなを、かまへ出で、覗き侍りしかば、簾に几帳そへて、清げなる法師二三人ばかり、すべていみじくをかしげなりし人、几帳のつらに添ひ臥して、この居たる法師近く喚びて物言ふ。

といふくだりがあつた。そして頭注に「障子のあなをかまへ出で」は障子に穴をあけてのぞいたのであらう。

期にはカマヘルはトメルの同義語として用ゐられてゐたが、前者が死語となつて解し難くなつた結果、次の時代には「穴をかまへ」が「あなたへ」にすげかへられるといふことなども出て來たのはあるまいか。このカマヘルが *kameyyn* の形で今尚南島方言に生きてゐるから、之を以て古典中の疑義をたゞすのも亦一つの方法だと私は考へてゐる。

Ubi 御水の義。u は接頭語で、bi が語根である。

O-boi-u-bui-u-bi と轉訛した語で、更に *ni* (御) といふ接頭語をつけて、*ni-ubi* とすることもある。『混効驗集』に、「みおへ井、水の事也。あまものとも云」と見えてゐるが、あまもの (*amannu*) は甘物の義で、航海中にのみ用ゐられる語である。Ubi は池や川や井戸などにたゞある水をいふので無く、古くは汲んで飲む水の義に用ゐられたらしいが、今では神事に關係した時で無ければ用ゐられない。『聞得大君御殿並御城御規式之次第』といふ記録に「二月御祭之前日首里殿内よりさやは(靈地の名)之美御水・久葉之根・麥の美穂差上云々」と見えてゐる。又年申行中に、二月と六月とに *ni-nadi* (御水撫) といつて、見晴らしのいゝ井泉のある場所で、祖

あな、へとある本もあるが、穴をかまへての方がよく文意が通る」とあるのを見て、面白いと思つた。試みに、日本文學大系博文館本その他二三の活字本について調べたら、なるほど「穴をかまへ」が何れも「あなたへ」と訂正してある。私は最古のテキストにどうなつてゐるかは、毛頭知らないで、何れどなたかにおき、したいと思つてゐるが、常識的に前後の關係から考へると、久松氏が據られたテキストにある方が無理がないやうな氣がする。たゞ一つ、久松氏に伺ひ度いのは、「かまへる」に「あける」の義があるかといふことである。數種の辭典を引いても、見出せなかつたが、何か古典にでも出てゐるのだらうか。暫らく琉球語といふ生きた辭書を使用することが許されるならば、「かまへ出で」は、現代琉球語の *kame njachi* に相當するやうだから、「探し出で」の義に解したい。所謂「あかり障子」(琉球語ではアカイ) なら穴をあけるのも造作ないが、當時の障子といふのは多くは「衾障子」の事だから、それに穴をあけてのぞいたと解するのはどうであらうか。この場合には、あいてゐる穴を見つけ出して、其處からのぞいたと解する方が穩當のやうに思はれてならない。思ふに、平安朝

先の墳墓の地を遙拜することもある。其時錫瓶或は其他の器に清水を汲んで、このウビーを額につけるが、さうするのを *ubi nadyyn* とすつてゐる。u-bi といふ語は、甚しくなまつてゐるので、その原形がわからなくなつてゐるが、古事記延喜式等に見えてゐるおもひ (御水) や日本書紀催馬樂等に出てゐるみひ (御水) と同語であることはいふまでもない。營に音韻の類似ばかりからでなく、其の内容から見ても、二者は決して別物ではあるまい。試みに、古事傳中の數行を拜借して説明に代へよう。

玉器は多麻母比と訓べし、書紀武烈卷、哥に、柁摩暮比爾瀾逼佐倍母理、(玉器に水さへ盛なり) とあり和名抄瓦器類に、説文云、盃小盃也、字亦作椀、辨色成云、末里、俗云毛比、(毛比はいと古き名なるを俗云とあるは誤なり) 萬葉四に片坑、(坑、字は、坑の誤りか) 大膳式に、片坑十二口、片坑四十八口片坑八十七口、豐受宮儀式帳に、御水四毛比、御水六毛比、など見えたり、(主水、又さいばら飛鳥井、哥に、御母比も寒しなど云る母比は、水を云り、但池川などにたいある水を、凡て母比とはいはず、母

比は、汲て飲む水の名なり、其はかの武烈紀の哥などを以て思ふに、盛る器の名より出たるにやあらむ。また内膳式に、理十一日(汲運水料)由加十六口、(汲運水料とあり、和名抄に、俗人呼大桶爲山加平介)主水式に、汲水料器に、缶一口、土塊一合、(加盤)片盤五口など見え、此、外も水を盛器種々、式に見えたり、さて後世には、井より水を汲揚るには、必細など著たる都流倍を用ふる事なれども、(和名抄に、罐汲水器也、楊氏漢語抄云都流閉)上代の井は、浅き泉なるなども多かりしかば、(今も山里などのは然なり)盛器を以て、直に汲揚もしつとおぼしければ、此の玉器も、盛器以て汲々にてもあるべく、又汲たるを盛る料にても有べし、(次の文に、酌水入玉器貢進とあれば、汲揚るのみの料には非ず)書紀には此を、玉鏡玉壺玉瓶など作れたり、皆タマモヒと訓べきなり、(玉鏡をタママリと訓たり、麻理も、古き名とは聞えたり云々)

さながら南島の井川の説明でも聞いてゐるやうな氣がする。これで「Eto」の語源を知ることが出来ると共に、これによつて日本々土でとうの昔死語となつた語が南島に

ける也、四季物語、菊のみきは云々、上戸まかりしていくたびもかたむく、夢窓國師百首、奥山のあら木のまかり、そのまゝにうるしつけねばはげいろもなし。

と見えてゐるが、これなども本土で消滅して、南島に保存されてゐるものゝ一で、どの島でも使はれてゐる、至つて普通の語である。

Kaku 襦袢。南島で一般に使はれてゐて、鬼界島ではそれが縮まつて、Kko又はKkoになつてゐる。國語の古語カカフの轉訛して保存されてゐることは言ふまでもない。奈良の方言で襦袢をカッコといつてゐるのもこれであらう。例の増補語林に、

かいふ、字鏡、殘帛也、不禮加々不、八雲四、つじれの名をいふ也、萬五、布肩衣の、海松の如、わけさがれる、かかふのみ、肩に打かけ、顯昭云、きりくすはつりさせ、かいはひろはんとなくといへり、かいはきぬ布のやれて、何にもすべくもなきをいふ。

と見えてゐるが、その同義語に、かかは(帷)がある。琉球語では之をヤリ・カコー(不禮加々不の義)とも

まだ生きてゐる適例をも見ることが出来る。序でに、この麻理に類似の語が南島の方言に遺つてゐることも言つて置きたい。鬼界島の方言では、陶器の碗をマリー若しくはマリーといつてゐるが、同方言ではマカはマリーとなるから、その古形はマカリ若しくはマカイである。琉球語では、今でも碗のことをマカイといつてゐるが、華夷譯語の琉球語に「碗、麻加里」とあり、オモロにも「百まかり」と見え、混効驗集にも「おまかり、茶碗の類、を云。和詞にもまかり」と書いてあるから、三四百年前にはマカリと發音したことが知れる。講義研究所本倭訓葉中に収めてある増補語林に、

まかり、徒然草、久我相國殿上にて水をめしけるに主殿司土器を奉りければ、まかりを參らせよとて、まかりしてぞめしける、信云、一條兼冬公御説云、まかり本名合子といふ、出家などの用るまろくぬりたるものゝごとし、殿上人の殿上にてものなど食ふもの也、昔は當に殿上に有より古書に載す、今はなし、こゝにいふは主殿司相國なれば、あがめて土器を奉りければ、相國は、よし相國にもあれ、殿上にあるうへは殿上人の格あるべしとて、まかりをめし

いつてゐる。そしてそれでこさへた雑巾のことをカコー・ズスイといひ、布などの焦げる臭即ちきぬくさいをカコーピカザ(殘帛火臭の義)といつてゐる。

Fukuta 衣の一種。言泉に、「ふくだい、古の衣の一。その制、詳かならず。「古語」宇治「年頃のふくだい」をのみ著て行ひければ」とあるが、このふくだいと同じものかも知れぬ。増補語林には、「宇治拾八、ふくだいといふものを、なべてにもにす、ふとき」として、あつくと、こまかにしたるを云々、このふくだいをのみ著て」を引用してあるが、これを見ると、ふくだいの制はFukutaのそれに稍々近いやうに思はれる。Fukutaは襦袢布などを、Fukuta Jaehun 又は Fukuta abachun といふが、後の動詞には、むさくるしいといふ言語情調が伴ふやうだ。その動詞の前に wabu wabu といふ副詞がつくと、もつとひどい意味になる。

Bisa べそ。(一)小兒の泣き出さうとすること。(二)不興で強ひて口を噤んでゐること。それに sima(する)といふ動詞がつくと、「べそをかく」「べそを作る」の義

となり、kuehi (口) がついで bisai-guechi になると、「へそぐさ」「へしくち」と同じく、不興なる口つき又は泣出しやうな口つきの意味になる。「とがめだて」を意味する bita も、それから分化した語に違ひない。それと shun とついで、bita shun にすると、咎めだてをするの意になる。

Binasa ふつゝか・ぶてうはふ・ふゆきとゞき等の義を有する語で、口語では binasa-wassa といふ複合語としても使はれる。この語は首里市及び田舎では盛んに使はれてゐるが、那覇市では全く使はれてゐない。琉歌の中には、binasa-haganasa といふ複合語となつて現はれてゐる。この語は平安朝時代の物語類に能く出て来るびなし(たよりなきこと・不都合なこと・あるまじきこと等の義で、便なしの約まつたものだといふ)と同語であらう。この語は奄美大島諸島の方言にもあるやうだが宮良氏の「八重山語彙」には見えないやうだ。鬼界島の方言では、間に合はなすといふ事を binaran 又は bi-utan とつてゐる。そして間に合はせて呉れには binachi kuri とつてゐるが、之に相當する琉球語は mi-nachi kwiri y' mi には實即ち完成の義があるから、びなし

が便の約であるといふ説は考へ直さなければならぬかも知れぬ。

Agayun 上の義から轉じて、集まつた者が退散する意になつた語か。Nachi(市) nu agayi jhnu(時分)、gakō(學校) nu agayun といつたやうに用ゐられてゐる。國語にも古く之と同じ言表し方があつた。増補語林に、かういふことがある。

あがるい、あつまりたる物のかたぐひにわかれゆくを云、天武紀、悉散走^{あがるい}、同、入、陣衆亂而散走之^{あがるい}「不可禁、紫式部日記たちあがれやすむ、源帯木、これかれまかりあがるゝところにて、空穂俊隆、もとめ奉らんにおはしまさずば、くびをも奉らんと申しければ、いとまたびて、みな十人廿人とあがれて、よへの道をもとめ奉る。

これで見ると、agayun の語源は他に求めなければならぬやうな氣もする。それは琉球語にも國語同様に akariyun (別る) といふ語があるからだ。この語は戀人同志が離縁するとか禽獸が親を離れるとかいふ義に用ゐられてゐるが、後者の場合には、その他動詞は ashun になる。これは引裂く・引きはなす等の義にも用ゐら

れる。Ura-akari (幼きものが親から離れること)・chi-akari (離乳)等の複合語もある。菓物その他農物が季節が過ぎて市上に現れるを、achagayun といふが、これは agayun を基礎とした語に違ひない。

Sashun さす(差す)。人を使にやるの義。古語で、琉歌に遺つてゐる。

首里加那志奉公取る人や多さ、必ずと里前御差し召しやうち

國家の御奉公は、何人も喜んでするものです。あなた、是非お使ひに行つていらつしやい、といふ意である。海外に使ひする役人の妻がよんだ歌である。

だんじよ嘉例吉や、撰で差し召しやいる。船の纜取れば、風や眞鱸

ほんとに、縁喜のいゝ旅には、特に人を撰んで、使はされることよ、船が纜を解くと、風は早や追手になつてゐる、といふほどの意である。婦人たちは、見送りの場合には、今でも波止場でこの歌を合唱してゐる。竹取物語にある一勅使には少將高野のおほくにといふ人をさして云々」のさしても使にやりての義で、右の琉歌中の語と同じ意味に使はれてゐる。(つゞく)

質問

日常の常用の挨拶語

蓮田善明

例、お早う、おやすみ、おつかれ、さよなら、御免、やあ、今日は、今晚は、おいでやす、あば、失禮、失敬、お邪魔しました、おかへり、いらつしやい、行つていらつしやい、ありがたう、景氣は、もうかりまつか、ようおいで、またどうぞ、相變らず、お暑いね、天氣がつよきますね、

×右、及び右の他、發音通りに、その地方、場合、使用者の男女、老少、身分、職業、新古、多少、稀廢及びその意義、起源等についての御意見も附記して載きたいと思ひます。